

ペキロマイセス テヌイペス(商品名:ゴッツA)による野菜類の オンシツコナジラミの防除

農業・園芸総合研究所

1 取り上げた理由

オンシツコナジラミは園芸作物において、薬剤抵抗性の発達などから難防除害虫とされている。そのような中、ペキロマイセス テヌイペス剤はオンシツコナジラミに対し高い防除効果を示す。この菌は昆虫類に感染し死亡させるカビの仲間、ほ乳類などには感染しないきわめて安全性が高い糸状菌である。さらに、化学合成農薬としてカウントされないため、有機栽培・特別栽培農産物でも使用できるので普及情報とする。

2 普及情報

1) 微生物殺虫剤のペキロマイセス テヌイペス剤は、イチゴのオンシツコナジラミに対して、対照薬剤ピメトロジン水和剤に勝る防除効果を示す(図1)。

a 薬剤名 ペキロマイセス テヌイペス(商品名:ゴッツA)

b 有効成分、物理化学的性状

a) 有効成分:ペキロマイセス テヌイペス(*Paecilomyces tenuipes*) 5×10^8 cfu/ml

b) 性状:褐色懸濁可乳化油状液体

c) 毒性:普通物, 魚毒性: -

c 適用作物と対象害虫

野菜類(施設栽培):コナジラミ類

d 使用方法

a) 使用時期:発生初期

b) 使用回数: -

c) 使用濃度:500~1,000倍液

d) 使用方法:散布

3 利活用の留意点

1) 本剤は入手後冷暗所に保存し、開封後は早めに使い切る。

2) 本剤は貯蔵中に分離することがあるので、使用に際しては容器をよく振り、調整後はそのまま放置せず、できるだけ速やかに散布する。

3) 本剤の容器には乾燥剤が封入されているので、取り出したりしない。

4) 他の薬剤との混用は効果が十分に発揮されない場合があるので注意する。また、本剤に影響を及ぼす薬剤があるので、本剤の使用期間中に他剤を処理する場合は十分に注意する。

5) アルカリ性の強い葉面施用の肥料等の混用は避ける。

6) 本剤の効果を十分に発揮させるためには、散布液が葉裏にも十分かかるように散布する。害虫の発生初期から、7日程度の間隔で合計3~4回散布する。また、ある程度の湿度を必要とするため、午後遅くまたは夕方に散布し、散布当日の夜間は施設を締め切る。

7) ミツバチに対して影響があるため、ミツバチの巣箱およびその周辺にかからないようにするが、受粉促進を目的としてミツバチ等を放飼中の施設等では使用を避ける。なお、ミツバチを放飼する場合は、散布後1日以上たってから行う。さらに、養蜂が行われている地域では、周辺への飛散に注意する等、ミツバチへの危害防止に努める。

8) 蚕に対して影響があるので、周辺の桑葉にはかからないようにする。

9) 適用作物群に属する作物またはその新品種に本剤をはじめて使用する場合には、使用者の責任において事前に薬害の有無を十分確認してから使用する。

10) 本剤の価格は500mlで8,000円程度である。

(問い合わせ先:農業・園芸総合研究所園芸環境部 電話022-383-8123)

4 背景となった主要な試験研究

1) 研究課題名及び研究期間

新農薬による園芸病害虫の防除 平成17年度

2) 参考データ

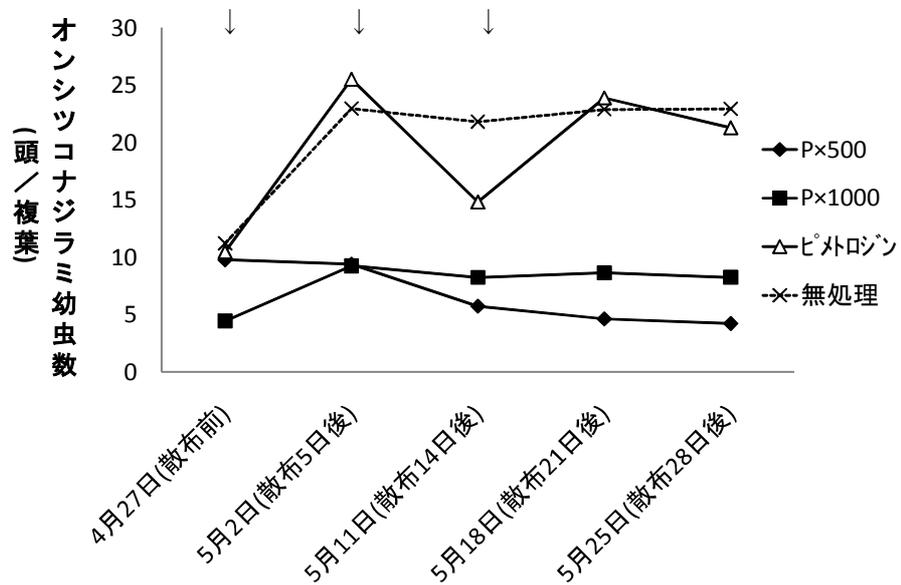


図1 イチゴのオンシツコナジラミに対するペキロマイセス テヌイペス剤の防除効果 (平成17年, 農園研内, 品種:とちおとめ)
P×500: ペキロマイセス テヌイペス500倍液, P×1000: 同1000倍液,
ヒメトロン: フェス水和剤3000倍液
散布月日: 平成17年4月27日, 5月2日, 5月11日 (フェスは4月27日の1回散布のみ),
3反復

3) 発表論文等 なし